

『古今著聞集』卷第五和歌第六、花山院関連和歌説話と

弘徽殿の女御説話の配置について

小野寺 貴 之

はじめに

『古今著聞集』和歌の部の巻頭話に続く一四四話から一四六話までの三話は、花山院とその親しい人物について扱った、と見ることが出来る説話群である。以後、この三話の総体を花山院関連説話とみなし、本稿ではその相互関係に着目する。

近年、島田遼氏は『古今著聞集』和歌の部の編纂意識について、説話の配列の相互関係を考察する重要性について指摘している。島田氏は一四七話「東三条院、撫子合せの事」において、歌合で「みぎは」という言葉を用いて自陣の勝利を願った歌が挙げられていることを踏まえ、「第一四七話をさらに発展させたような内容の第一四八話が、第一四七話の採録をきっかけとして撰者の脳裏によぎり、続いて採録されたものと考えられる」と述

べ、一四八話「帯刀の陣の十番の歌合せの事」が次の話に採られる理由となった可能性を示している。その上で、

『著聞集』巻第五和歌第六に関しては概ね時代順に配置されるとされる。異なる部分もあるがその法則は頷ける。しかし第一四七話、第一四八話を見るとそれだけではなく、前話の説話内容が次の説話の配列に影響を与えていると考えられる。和歌の部に限らず広く精査しなければならぬ問題だが、とある説話の連想により次の説話が配置されるということは他にも見つけられるはずである。概ね時代順というだけでなく、隣り合う説話の連鎖によって『著聞集』が配置されている可能性を提示したい。⁽¹⁾

と指摘している。島田氏の視点は、時代や人物関係が近

い配列であるというだけではなく、説話同士が話として連続した関係を持っていなくても、それとは別に隣り合う本文同士に何らかの相関性を持つ要素が含まれている可能性を示唆したものである。

本稿で最初に扱う一四四話は、配列から見た視点と内容から見た視点で各々に、異なる人物を指す話として扱うことができるという問題を抱えている。この話の主役「弘徽殿の女御」を、編者が誰と想定した上で話をこの位置に置いているのか、という問題である。この問題を、島田氏の述べるような配列上の相関関係について考察することで整理し、編者の誤りにも受け取れる一四四話の配置が、一四五話と一四六話を含んだ花山院関連説話との相互関係を意識したものである可能性を考察する。

一、一四四話「弘徽殿の女御」の問題点

弘徽殿の女御の歌合せに、花かうじ・しらまゆみといへる文字ぐさを歌の句のかみにすゑて、折句の歌によませられける、めづらしかりける事なり。大かたの題には四季・恋をこそもちゐられ侍れ。

〔古今著聞集〕巻第五和歌第六・一四四話⁽²⁾

一四四話は弘徽殿の女御の歌合の話である。この歌合は

その名称面と内容面から、現在確認し得るものとしては、『平安朝歌合大成』に紹介される「弘徽殿女御義子歌合」が最も適合する情報を備えていると考えられる。萩谷朴氏が『平安朝歌合大成 増補新訂版 第二巻』所収の「一一四〔長徳二年八月―寛弘八年六月〕弘徽殿女御義子歌合」の副文献資料として『和歌合抄』目録の

〔和歌合抄目録〕巻四

^{善子}弘徽殿女御歌合 五番 題字錡 判者

一条院女御 太政大臣公季公女⁽³⁾

との記録を挙げ、併せて『古今著聞集』一四四話も載せて関連するものとして扱っている。この歌合の内容は現在伝わっていない。しかし「弘徽殿の女御」という名称の一致と、一四四話の「文字ぐさり」と『和歌合抄』目録の「字錡」という歌合の趣向を示す語の同義性により、萩谷氏は両者が同一の内容を指しているという立場をとっている。

古今著聞集が果して、本歌合の証本によって説をなしたか否かは明らかではないが、著聞集の記述に従えば、それは単純な折句も物名歌でしかなく、文字ぐさりとはいえないものとなる。(中略)和歌合抄の

目録に五番とあるから、文字ぐさりの隠題が五つあったものと思われるが、その中に古今著聞集が挙げた二つが入っているかどうかは判定し難い。何れにせよ、歌合中停期における、好笑的興味によって生れた新趣向であったと考えられる⁴⁾。

また、萩谷氏が不審視した「花かうじ・しらまゆみ」という歌題について櫻井利佳氏は、編者が歌合の内容に触れられない状況ではあったが「類聚歌合」あるいは「古今歌合」の、散逸した目録の情報の中に見出していた可能性を指摘している⁵⁾。

しかし、こうした内容面から判断して一四四話の歌合を「弘徽殿女御義子歌合」と同一の物であるとすると、『古今著聞集』における以後の説話の配列と照らした際に疑問が生じてくる。「弘徽殿の女御」を藤原義子、すなわち一条天皇の女御の義子だとすると、次の一四五話と一四六話が花山院の出家後の話で、以降の話の配列が概ね年代順に進んでいく関係上、仮に配列に従えば一四八話の主題である、正暦四年の帯刀陣歌合の後あたりに採話されるのが妥当と考えられるのである。

次に、一四四話を『古今著聞集』の配列面から考察すると、花山天皇と同時代か前の時代の「弘徽殿の女御」に相当することとなる。これに該当するのは村上天皇の

女御藤原述子か、または花山天皇の女御藤原柅子となる。後述するように、主要な『古今著聞集』の注釈は次の話との関係を考慮してか、柅子説をとっている。そうすると今度は、時系列順としての配列を乱さなくなる一方、内容面で問題が生じてくることになる。現在伝わる記録上では、述子、柅子の両女御が歌合を催したとは思われないからである。この問題について編者の目線から整理すると、一四四話には次の三つの可能性が考えられる。

A、「弘徽殿の女御」が義子を指すものであり、話の内容に問題はないが編者が配列順を間違えたか、義子の生きた時代を勘違いしていた可能性。

B、「弘徽殿の女御」が柅子(もしくは述子)を表すものであり、配列上は問題がないが編者が義子の歌合を柅子が行ったものだと混同している可能性。

C、「弘徽殿の女御」である柅子(もしくは述子)が行った歌合が実際に存在し編者はそれに取材をしており問題がないが、現存する記録や資料に確認がとれない。あるいは「和歌合抄」の情報ではなく、編者は「弘徽殿の女御」を柅子(または述氏)とした目録情報を目にしたという可能性。

このうちC説は検討のしようがなく、今まで誰もその

可能性に言及しておらず、またその可能性についても、述子、祇子の両女御がどちらも入内して一年を待たずに病で亡くなっていることから低いものだと思われる。そのため本稿でもその可能性は追わないこととする。先行する注釈では、新潮社日本古典集成とフェリス女学院の『古今著聞集』巻第五「和歌第六」を読む⁽¹⁾ではBの祇子説、日本古典文学大系でも歌合の内容に疑問を呈しながらも配列の重要性を優先し「祇子か」、としている(B説)。対して、前に挙げたように、萩谷氏は『平安朝歌合大成』において一四四話を『和歌合抄』の目録に記載されている義子の歌合を扱ったものであるという前提で捉え、「弘徽殿女御義子歌合」の考証に組み込んでいる他、後述する説話研究会の注で一四四話を担当した櫻井氏も、『古今著聞集』の原拠としての『歌合(十卷本)』試論⁽²⁾で義子の歌合と同定し、『古今著聞集』和歌の部の配列を乱すものと捉えている(A説)。また説話研究会の『古今著聞集』新解(三)和歌第六⁽³⁾では、史実としては義子ではあるが編者が祇子と誤解をしているとして、(A)(B)の両方の可能性を視野に入れた上で編者の過失に矛盾の原因を求めている(B説)。

A説とB説に可能性が分かれてしまう原因は、「弘徽殿の女御」の正体を確定しようとする際にはじめて要求される、この説話の不備に集約される。それは、同一の

名称を備えた別の人物が、他の年代にも存在していることが確実な人名を扱うとき、その人物を限定できる語を話の中に補っていない、という不備である。つまり、『古今著聞集』和歌の部に実際に出て来る表現を例示すれば、一六〇話の冒頭「長寛の比」のように「年号+比」とつけるだけでも良いし、二三〇話冒頭「後鳥羽院の御時」のように「天皇+御代」でも補完し得る。時代を補う以外にも、一五〇話「齋院の選子」のように名前を直接表記する方法や、天皇の名を使用して「〇〇院の女御」といった表現も選択し得たと思われる。こうした語が一四四話に補われなかったことを問題視するとき、その原因は大きく二つの可能性に分けられる。

一つ目は、編者が時代や名前を補う語を入れ忘れた、歌合の内容から入れなくても分かると思った、あるいは何らかの制約によって入れられなかったという消極的な選択の結果である可能性である。このうち、何らかの制約によって補われなかった場合、例えば編者が原拠とした情報に年号や名前が記されておらず、そのままの状態⁽⁴⁾で採話したことが想定し得る。実際に一四七話は「寛和二年七月七日皇太后詮子瞿麦合」の日記とほとんど同一⁽⁵⁾と言って良い説明が加えられており、櫻井氏の言うように一四四話が目録を原拠として記述された場合、そこに名前も年月も添えられていなければ編者としては判断し

ようなないものであったと考えられる。

もう一つは、編者が敢えて時代や名前を補う語を入れなかったという積極的な選択の結果であった可能性である。

一四四話に人物を特定し得る情報が乏しいことの原因が、消極的選択による場合であれ積極的選択による場合であれ、配列上一四五話の前に置かれていることには編者の意図が介在していることが出来る。消極的選択による場合、それが原拠の記述不足に由来すると仮定したとき、編者は「弘徽殿の女御」がどの女御を指すものとするべきか選択を迫られたはずだからである。また、編者の怠慢や過失を原因とする場合も、編者自身は「弘徽殿の女御」が誰なのかという情報に接しているため、一四四話の配置は敢えてのことといえる。その結果、少なくとも配列順で見た場合、述子、侘子のいずれかが合致する場所へ、そして続く一四五話を読んだ時に受け手が濃厚に侘子を想起し得る場所への配話を選択したことになる。また原拠に名前や時代を示す語があったにも関わらず、積極的な理由でそれを入れない選択をした場合も、その行動は結果的に配列上、「弘徽殿の女御」が侘子として受け取られるように働いている。そのためやはり、一四四話の「弘徽殿の女御」については、『説話』が説明するように編者の誤りである可能性も想定し得る。

ものの、少なくとも配列上は侘子と見られるように編者が意図して選択を行っていることが出来るものがある。

二、一四五話の編集意図と前話との関係性

1 一四五話の和歌の他出と詠歌状況の違い

『古今著聞集』和歌の部の一四五話は次のようなものである。

花山院、御ぐしおろさせ給ひて後、叡山より下らせ給ひけるに、東坂本の辺に、紅梅のいとおもしろう咲きたりけるを、立ちとどまらせ給ひて、しばし御覽せられけり。惟茂の弁の入道、御供に候ひけるが、「王位をすてて御出家ある程ならば、これ体のたはぶれたる御振舞はあるまじき御事に候ふ」と申し侍りければ、よませ給うける、

色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞみる

(『古今著聞集』巻第五和歌第六・一四五話)⁽¹²⁾

本話は、出家した花山院が東坂本で梅の花を見て歌を詠

む、というものであるが、この歌については『古今著聞集』成立期頃までに次のような他出が確認できる。

色香をば思ひもいれず梅の花常ならぬ世によそへて
ぞ見る
華山院御製

〔『和漢朗詠集』春・梅付紅梅・一〇一〕

梅の花を見給ひて
花山院御哥

色香をば思ひも入れず梅の花常ならぬ世によそへて
ぞ見る

〔『新古今和歌集』卷第十六・雑歌上・一四四五〕

花山院の道心の発り給へりける比、御堂の御殿の御方より、紅梅の殊色も薫も妙に侍りけるを、一枝まいらせける御返事に、

色香をばおもひもいれず梅のはなつねならぬ世によそへてぞみる

と読給へりける、哀に侍り。常なき世には、色をも香をも思入じ。花も世も常ならましかば、花にもかにも心をとめまし物を。実、無常を思食、しめさせ給へりける、いとかたじけなくぞ覚侍る。御堂の御殿も、殊哀に覚えていまそかりけるまゝに、そごろに御袖をぬらさせ給へりと、伝承侍し。

〔『撰集抄』卷八―第二四話(花山院 哥)〕

存在したとされる『花山院御集』が散逸している現状では、^{〔6〕}本歌が最も早い段階で確認できるのは『和漢朗詠集』の「紅梅」の歌としてである。次に現れる『新古今和歌集』は詞書に「梅の花を見給ひて」とあり、雑の部に入れられている。しかしながら、『和漢朗詠集』と『新古今和歌集』からは花山院が仏道へ帰依していく、どの段階の歌であるかは読み取ることができない。

この歌を具体的な花山院の発心、出家の状況と絡めたものは『古今著聞集』と『撰集抄』の説話に確認できる。しかしながらその両者の描写は異なっている。

『撰集抄』では花山院が「道心の発」った頃に、梅の木を受け取るという、時間も場所も『古今著聞集』に比べると曖昧な状況であるのに対して、『古今著聞集』においては花山院がその退位後の出来事とされる、出家して比叡山から下山している途中に梅の木を見ているという特定された状況となっている。この花山院の詠歌状況をめぐり、『古今著聞集』よりも『撰集抄』が妥当と見たのは今井源衛氏である。

ここに云う「御堂の御方」とは、道長の北方二人、倫子・明子のどちらか明らかでない。「道心を発し

給へるころ」も確定はできないが、退位の翌年くらいとみるのが穏当で、とすれば、丁度院が比叡滞在中のころであり、道長室がわざわざ歌をおくるにはやや不似合である。しかし、この点を除けば話全体としては、撰集抄の方が、著聞集の作りごとめいてゐるのよりも、よほど自然であることは疑えず、当時の贈答歌の一つとして、さもあろうべきことに思われる。

対して、久保田淳氏は「実際のところは、『古今著聞集』の伝承以外、花山院が出家して修行のために行脚中の作であることを証する資料はない」と留保を一つつつ、

出家後の作と見るのがやはり自然であろう。美しい梅花をも無常な世の象徴と見るといふ主題があらわにすぎる感がないでもない。が、それだけこのように歌った花山院の道心はひたむきであったということかもしれない。

と、その内容面から『古今著聞集』の状況に近い出家後の作と見ている。また小島孝之氏も、

『撰集抄』の説話と『古今著聞集』の説話といふ

れが真実を伝えるものであるか、速断はできないが、少なくとも『古今著聞集』の方の話には矛盾がない。『撰集抄』では、花山院の出家直前の詠歌とされているが、『新古今集』の諸家の注釈はみな出家後の歌とみており、それが妥当であろう。

として、『撰集抄』の当該話は「何ら詠歌事情の説明のないものをもとにして、自由に創作したと見るのが正しいであろう」との立場をとっている。また新潮古典集成『古今著聞集』の解説において、西尾光一氏は「この御製にこういふ説話がいつどのようにして付いたのかかわからない」としながら、両話の違いとして出家以前か以後かという点に着目している。

この四者による評価の違いにも表れているように、『古今著聞集』と『撰集抄』のどちらがより実際の詠歌状況に近かったのかを確認することは難しい。ここで両話の異同を和歌を中心として、詠歌時期と詠歌状況で整理すると次のようになるだろう。

詠歌時期…『撰集抄』では花山院の仏道への傾倒の段階が、具体的な記録と結びつけることができず曖昧であるが、『古今著聞集』では退位と出家が確定しており、世俗を離れた価値観の実践者と

しての視点であることが明確である。

詠歌状況…『撰集抄』では特定の相手から送られて来た梅の枝への反応であり、歌はその相手に対する返事として見るのが普通となるが、『古今著聞集』では梅の木を見ることで自発的に歌が発生しており、向けるべき具体的な相手は見いだせない。

こうした違いが表れた背景には、まず『古今著聞集』と『撰集抄』では依拠した原拠が異なっているという可能性を指摘し得るが、現状ではその原拠資料を確認することはできない。また小島氏の言うように、どちらか、あるいはどちらもが歌を起点とした創作であるという可能性も残される。

一方、『古今著聞集』の一四五話と『撰集抄』を比較した際、話そのものの虚実とは別に、配話環境の違いが挙げられる。『撰集抄』とは異なり、『古今著聞集』の一四五話は前後を花山院に関連する、または関連すると考え得る話に挟まれている。両話のどちらがより実際に近いかということを明かにするのは困難だが、少なくとも『古今著聞集』における一四五話の形成のされ方について、前後の配列にその一因を求めて考察を試みることは可能である。

2 「弘徽殿の女御」 祇子と花山院

一四四話の「弘徽殿の女御」について、諸注釈において同定される祇子は花山院の女御である。『日本紀略』によれば永観二年十月に、

○十八日甲午。大納言藤原朝臣為光卿女祇子入掖庭。

翌十一月に

○七日癸丑。宣旨。以大納言藤原為光卿第二女祇子為女御者。以弘徽殿為休所。

として、花山院の女御になったと記録されている。またその死については寛和元年七月、

○十八日辛酉。未剋。女御藤原祇子卒。大納言為光卿女也。懷孕之間。日来病惱。天下哀之。

(以上、『日本紀略』後篇八「華山」⁽²⁾)
として

祇子に対する花山院の寵愛ぶりを描写し、その死を花山院の出家と直接結びつけたものには、まず『栄花物語』が挙げられる。その寵愛ぶりとしては、

かかるほどに、一条の大納言の御姫君したてて参らせ給ふ。(中略)弘徽殿に住ませ給ふ。すべてこれ

はもろもろに勝りていみじう時めき給へば、大納言いみじう嬉しおぼして、いとど御祈をせさせ給ふ。

と最初から他の女御と比べて並々ならないものとして登場しており、その特別扱いは入内後すぐに病に伏せた後も引き続き行われる。

かかる程にただならずならせ給ひにけり。(中略)はかなき御果物なども、かしこにはつゆかひなうきこしめさねど、「まづまづ」と奉らせ給ふを、大納言、「いと世づかずや」など、うち歎きつつ過ぐし給ふ程に、せめておぼつかなく恋しく思ひきこえ給ひて、「ただ宵の程」とのみの給すれど、

そして、忒子が無くなつた後には「内にも垂れ籠めておはしまして、御声も惜しませ給はず、いとさま悪しきまで泣かせ給」つた花山院はしばらくして次のように発心し、その後出家に到る。

かくあはれくなどありし程に、はかなく寛和二年にもなりぬ。世の中正月より心のどかならず、怪しうものさとしなど繁うて、内にも御物忌がちにておはします。又、いかなる頃にかあらん、世の中

の人いみじく道心起して尼法師になり果てぬとのみ聞ゆ。これをみかど聞しめして、はかなき世をおぼし歎かせ給て、「あはれ、弘徽殿いかに罪深からん。かかる人はいと罪重くこそあなれ。いかでかの罪を減さばや」と、おぼし乱るる事ども御心のちにあるべし。

(以上、『栄花物語』巻第二、花山たづぬる中納言)⁽²³⁾

この花山院の出家と忒子の死の因果関係は説話や歴史書でも扱われており、『古今著聞集』に先行する説話集である『古事談』にも重要な契機として忒子の死が記述される。

この御出家の発心は、弘徽殿の女御(恒徳公の女)鍾愛のあひだ、忽ちに薨逝す。よりにて御悲歎のところ、町尻殿、便宜を得、世間無常の法文(妻子珍宝及王位、臨命終時)不随者、等の文なり)等を書き、見せ奉り、御出家の事を勧め申さる。

(『古事談』「二〇 花山天皇、御出家御発心ノ事」)⁽²⁴⁾

また『古今著聞集』にやや先行して成立した歴史書である『愚管抄』においても次のように、花山院が出家するに到る内面的な要因として忒子の死が記されている。

花山院八十九ニテ為光ノムスメ最愛ニオボシメシケル后ニヲクレサセ給テ、カギリナク道心ヲオコサセ給テ、ヨニモアラジトオボシメシテ、ウチナガメツ、オハシケルニ、大入道殿ノ運ノオソコキトヲ常ニナゲカセ給ケル、二郎子ニテ粟田殿七日関白トイハル、人ハ、ソノ時五位藏人・左少弁トテ、時ノ職事ナレバ、チカクミヤヅカヒテオハシケルニ、「世ノアデキナク出家シテ仏道ニ入ナント思フ」トノミ仰ラレルヲキ、テ、オリヲエタリトコソハ思ハレケメ。

〔愚管抄〕卷第三⁽²⁶⁾

『古今著聞集』よりも時代が下るが、『神皇正統記』でも花山院が出家に到る心理的な理由を侘子の死に求めており、⁽²⁶⁾こうした因果関係は定説化していたと推測される。このような前提で一四四話と一四五話を見ると、人物を特定しない(すなわち侘子であることを否定しない)「弘徽殿の女御」の話の後に、出家後の花山院の話という、受け手が因果関係を想像し得る順序で二人の人物がそれぞれに配されていると見ることが出来る。少なくとも一四五話に登場する出家後の花山院には、受け手に前話の「弘徽殿の女御」という語を侘子と再解釈させる、

あるいは「弘徽殿の女御」という語から花山院と侘子の関係を一瞬でも想起させる引力を働かせていることは否めないだろう。読者の中で一四四話と一四五話の配列の間に時間が流れ、その両話の間の時間経過による変化(すなわち一四四話の主役である弘徽殿の女御の死)が、次話が前提とする状況(すなわち花山院の出家)への因果関係として説明がつくのである。

詠歌状況について、一四五話が『撰集抄』のように、相手が存在する返事として詠まれた歌だとすると、その歌は、相手に向けて自分の心境を存分に吐露した歌である可能性もあるが、相手に対してのメッセージや配慮である可能性も高く、読者からすれば、記述によって顕在化している贈答相手が話の重要な構成要素として念頭に置かれる比重は高まる。対して『古今著聞集』では、詠歌の対象は花山院が自発的に見つけた梅の花であり、必然的に歌も自発的なものとなる。歌の内容がそのまま花山院の心境と繋がるのであり、読者も安心してそのように受け取ることができる。詠歌時期からして花山院の出家後の歌だとするならば、梅の花になぞらえた無常とは、説話や物語などで広く知られた因果関係から、また前話の「弘徽殿の女御」という語から、まず侘子の死を想起させる。一四四話に「弘徽殿の女御」という語が置かれ、それが侘子であると読者が想定することで、一四四話と

一四五話を跨いだ(梅の花)無常)侘子(の死)の等式が成り立つことになる。ここで、もし一四四話の「弘徽殿の女御」が侘子の話ではないと読者が確信する記述のものであれば、一四五話の梅の花の歌は前話と連関せず、無常に対する花山院の思いそのものを受け取るだけとなるだろう。また逆のことを言えば、一四五話に花山院の話が置かれなければ、一四四話は義子の話としてしか読まれ得ないはずである。

一四四話の配列順が編者の意図通り侘子を示すものと仮定するとき、またそのように読むとき、一四五話はかつて執着を極めた弘徽殿の女御侘子に対する、もしくは侘子に代表される世俗の執着に対する無常観を詠んだ話として前話に接続できる。またこの連関が成立するためには一四五話において花山院は侘子の死後の時間軸にいることを確定させる姿で登場しなければならぬのであり、少なくとも『古今著聞集』の一四五話において、「色香をば」歌が花山院出家後の姿で詠まれることで、その効果が生じる条件が整ったと言える。

3 積極的な選択の可能性についての検討

「新解(三)」が指摘するように、一四四話が編者の誤りによって配列された可能性は低くない。しかし、誤解

であると結論付ける前に、この配列が編者の意図によるものとして考えた場合の整合性を検討することも重要だと考える。

一四四話の状態をありのままに整理すると次のようになるであろう。

1. 内容としては、記録に確認できる弘徽殿の女御義子の歌合の情報を濃厚に連想し得る情報を用いている。
2. 配列としては、次の話との関係性から花山院の女御である弘徽殿の女御侘子であると濃厚に連想し得る場所に置かれている。
3. 時期や名前を特定できる語が補われていないため、内容面においては義子と解釈すればよく、明確な誤りとはみなせない。
4. 時期や名前を特定できる語が補われていないため、配列面においては侘子と解釈すればよく、明確な誤りとはみなせない。

一四四話の「弘徽殿の女御」という語は、編者が時期と名前を特定できる語を入れなかったことで、後世の享受者からは単独では義子の話として、次の話と連関することで侘子を象徴する語として機能し得るものとなっている。侘子は資料においてその本人による和歌のエピソ

ードを見出し難い存在である。しかし、前節で確認したように、一四五話と併せて一四四話の立ち位置を考えれば、一四四話の「弘徽殿の女御」が祇子であることに積極的な意味を見出すことが可能である。

配列が周到に考えられたもので、かつ内容についても編者は誤解をしていなかったと仮定した場合には、「弘徽殿の女御」が本当に祇子を示しているのか、義子を示しているのかというよりも、配列上、一四四話にその語が置かれたことで生じる効果に、そしてその置かれ方に編者の期待を見出すことができるのではないか。編者が祇子と義子を混同した、という可能性を打ち消すことは困難である。しかし、和歌のエピソードを見出し難い祇子のイメージを、和歌の部で花山院の話が始まる一四五話の前に持つて来るために、同じく「弘徽殿の女御」と称される別の時代に歌合を行った人物を、時代と名前を敢えて表さないことで編者が利用したのだという積極的な理由も、可能性の一つとして見出すことができるのではないか。一四五話について西尾氏は「和歌と説話記述とが緊密に結合して、文学的な意義や興味を持つもの」と評価している。不審視される一四四話の配置や、その不審を助長する名前と時期の不備も、編者の消極的選択による結果であるという結論とは別に、編者による創造的な、文学的な効果を期待した在り方である可能性

を、読解の視野に入れることもできるのではないか。

そして、積極的な選択の結果にせよ、消極的な選択の結果にせよ、一四四話の「弘徽殿の女御」に祇子のイメージが付与されることで、一四五話と一四六話の間にも一貫した花山院の人格が通底し得、一四六話の二つの和歌が採られた意味も鮮明になって来るのだと本稿では考える。

三、一四六話の編集意図と、花山院関連説話の相関関係

1 一四六話の他出と配列上の問題

同じ院、東院にわたらせ給ひける比、弾正の宮のうへ、おなじく住み給ひけり。十首の題をたまはせて、人々に歌よませて遣はせ給ひけるに、橘をよませ給うける、

宿ちかく花橘はうゑて見じ昔をこふるつまとなりけり

なほ昔をおぼしける御心のほど、あはれなり。また祝の歌に、弾正の宮のうへよみ給ひける、

万代もいかでかはてのなかるべき仏に君ははやくならなん

この祝こそ、まことにあらまほしきことなれ。松竹にたとへ、鶴亀によせて、千年をいはい、万代を契りても、いかでかはてはなからん。まことに仏の道に入らんのみぞ、まめやかにつきせぬ御祝なるべき。

〔『古今著聞集』卷第五和歌第六、一四六話〕⁽²⁸⁾

この話は、前話で登場した花山院が、東院に移った後で行った歌合を題材にしている。具体的には次の橘、祝の題の歌である。

橘

左

戒秀法師
古へもおもひぞいづる五月雨待つ花橘のかをりわすれで

右

院御
宿ちかく花橘は植ゑて見じむかしを恋ふるつまとなりけり

〔『正暦年間』夏 花山法皇東院歌合』五・六〕⁽²⁹⁾

祝

左

戒秀法師
おもふらむ岩根のこまついはねども雲の上まで生ひむものとは

右

彈正宮上
万づ代もいかでか涯てのなかるべき仏に君は早くならむ

〔『正暦年間』夏 花山法皇東院歌合』十六・十七〕⁽³⁰⁾

また十巻本の日記には

御門入道しおはしましてのち、東院におはしましけるころ、彈正宮上と二所住ませ給けるに、詠ませて合はせさせ給ける。

とあり、一四六話の状況説明とほとんど同じ内容のものが書かれている。本歌合について、萩谷氏は

即ち、本歌合の歌廿首の全てを覆う情緒は、一種憂愁の思いであるということが出来よう。殊に花山院御製の歌6の如きは昔を思い出すよすがとなる花橘の薫りも、むしろ、その思い出が現在の境涯をみじめなものとし打ち返し思わせるが故に、宿近くは植ゑるまいとの苦澁な心中を表白したものであり、更に彈正宮上の歌17に到っては、祝の題でありながら、限りあるこの世に未練を残さず、早く成仏し給えと厭離穢土欣求浄土の心を花山法皇に勧めるといふ型

破りの内容を盛っているのである。これまでの歌合の歌に釈教の心をよんだものはなかったし、まして、祝の歌に菩提を勧める歌をよむなどということは、今後と雖も常識をもってしては理解し難いところである。⁽³¹⁾

と、一四六話に採られた二つの歌を特に挙げて、この歌合が花山院と周辺人物の心境を究明する史料的价值があることを述べている。

一四六話に採られた歌の『古今著聞集』成立期頃までの他出としては、まず「宿近く」歌に

御修行の時、樹下に、行進し給て

やとちかくはなたち花はほりうへし　むかしをこふるつまとなりにき

〔『玄々集』花山法皇四首・二〕⁽³²⁾

屋戸近く花橘は掘り植ゑじ昔を恋妻と成けり

花山院

〔『新撰朗詠集』夏・花橘・一六三〕⁽³³⁾

題不知

花山院御製

宿近く花橘は掘り植ゑじ昔を恋ふる端となりけり

〔『金葉和歌集』第二夏・一二六〕⁽³⁴⁾

世をそむかせ給て後、花橘を御覧じてよませ給ひける

宿ちかく花橘は掘り植ゑじ昔をしのぶつまとなりけり

り

〔『詞花和歌集』第二夏・七〇〕⁽³⁵⁾

がある。この四つの集『金葉和歌集』は三奏本は、特に『玄々集』との影響関係が指摘されるものであり、先行研究でそれぞれ重複する歌が多いことが示されている。⁽³⁶⁾ 歌合には見られない「掘り植ゑじ」という言葉が共通していることも一連の流れにあることを思わせる。『玄々集』は花山院周辺との関係が指摘されているものの、この『玄々集』からの流れにあると思われる四首に比べると、『古今著聞集』は歌合と非常に近い形の歌を採っており、また日記の記述との近似性や次の「万代も」歌の存在もあって、採話にあたっては実際に歌合かその流れを汲むものから取材した可能性が濃厚であると考えられる。

「万代も」歌は、歌集よりも歌論書で取り上げられることが多く、

祝を得て祝はざる歌

花山院歌合 右判なし 弾正宮の上

万代もいかでかはてのなかるべき仏に君ははやく成らなん

〔袋草紙〕⁽³⁸⁾

抑花山院歌合弾上宮の

万代もいかでかはてのなかるべき仏に君ははやく成らなん

と云 これれは珍事也

〔八雲御抄〕巻第一・正義部・歌合仔細⁽³⁹⁾

という紹介がされている。両書ともに、「祝」の題にふさわしくない内容であるとして取りあげている。注目すべきは、『古今著聞集』における「万代も」歌の評語が、先行するこれらの歌論書における評価と異なる傾向を示しているということである。これについては萩谷氏が、

八雲御抄も、弾正宮上の歌17を「珍事也」として引用してはいるが、何故そのような歌がこの歌合に出されねばならなかったかということについては何等の解釈を下し得ていないようである。しかし、古今著聞集が本歌合の中から、歌6と歌17と、花山法

皇の境遇心事を如実に示す問題の歌のみを挙げたのは、流石に説話集の編纂者として、鋭い眼識を備えたものであるといえよう。⁽⁴⁰⁾

と、歌合が行われた境遇の文脈を備えた解釈を『八雲御抄』の評語は行っていないと指摘している。これは『袋草紙』における取り上げられ方にも同様に言えることであろう。

2 「宿近く」歌について

一四六話における「宿近く」歌について先行する解釈を見ていくと、新潮日本古典集成では「家のそばには花は植えまいと思う。その香をかぐと昔の貴女を思い出し恋しくなる種となってしまふから。」と、「花橋」を『古今和歌集』の「五月まつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(巻第三、夏・139)⁽⁴¹⁾のイメージに連なる、昔の人を恋しく思う象徴として解釈している。また「新解(三)」では「屋戸ちかく梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり」(巻第一、春上・34)⁽⁴²⁾によるものとしている。⁽⁴³⁾

「花橋」を昔、特に恋人を偲ぶイメージと重ねる歌は多く見られ、例えば当該歌と類似した語彙をもつ歌では

むかし見し人をぞしのぶ宿近く花たちばなのかをる
をりをり

〔『相模集』 537⁽⁴⁾〕

などがある。また「香り」を示す語を伴わなくとも、

橘の花咲く里に住まへども 昔を来問ふ人のなきか
な

〔『和泉式部集』 694⁽⁶⁾〕

など「五月まつ」歌に詠まれた昔の人を偲ばせる「香り」が、既に「花橘」という語に内包されている。「宿近く」歌において花山院が「花橘」をきっかけに「こぶる」ことを避けようとする「昔」、つまり今もなお忘れがたいままである過去とは、先行する解釈も指摘するよううに人物、特に恋人を指している可能性が高い。この歌が原拠である歌合の段階で実際に過去の恋人を偲んだ歌として詠まれたかはわからないが、『古今著聞集』の編者が歌合の中から、あるいは多くの花山院の御製からこの一首を撰ぶとき、「花橘」のイメージから、昔の恋人を偲ぶ花山院の人物像を形成しようとしていた可能性が考慮し得る。

一四五話と一四六話に共通するのは、過去の出来事に起因して発生した心理を想像させる花山院の姿であり、詠歌である。その態度は異なっており、一四五話で世の無常を詠み、俗世から離れた立場をとったと思われた花山院は、一四六話では過去にとらわれた人物像へと変貌している。一四六話の花山院が過去を偲んでいることを強調する要素の一つが、歌合にはない「宿近く」歌への評語である。「なほ昔をおぼしける御心のほど、あはれなり」という評語は編者の言葉であり、同時に一四六話の花山院をどのように見せたいかという『古今著聞集』の態度といえる。

一四五話と一四六話の花山院は過去に対する態度が異なっているように受け取れる。それでは、この二話の花山院が想起しているであろう、と編者が想定した過去はそれぞれ全く別々の事柄であろうか。

櫻井氏は前掲論文の中で、『古今著聞集』和歌の部の一四四話から一四八話までの配列が、それ以降の配列と異なり、実際の年代順を守っていないものであると指摘している。

一四七話は寛和二年(九八六)年七月、一四八話は正暦四年(九九三年)となる。一四六話は年時記載がないために編者自身も開催年を正確に知りえないと

いう事情があったかもしれないが、直前の一四五話の成立は花山院出家の後間もない頃の逸話であるから寛和三年(九八七)春頃、さらにその前の一四四話は長徳二年(九九六)〜寛弘八年(一〇一一)頃であり、『著聞集』が篇毎に編年的配列を行うという原則を乱している(一四八年に後接する一四九話は後冷泉、後三条、白河天皇代の頃で、問題は⁽⁴⁾ない)

この配列の乱れについて櫻井氏は、編者が原拠とした歌合の巻の順に引っ張られた可能性を指摘しており、説得力のある指摘となっている。その上で、本稿で考察してきたように、仮に編者が一四四話を忞子の話とする意図があったとした場合、配列の乱れについての一つの整理の可能性を示し得ると考える。それは編者が一四四話から一四六話までの三話を、「弘徽殿の女御」忞子を起点とする花山院関連説話として、一つの流れをもって採話しているという可能性である。

一四六話は、冒頭の「同じ院」という言葉からも一四五話の後日談としての位置を明確にしている。前章で考察したように、一四四話の「弘徽殿の女御」と一四五話の出家した花山院の間に暗黙の連関があるとすれば、一四五話の歌で梅の花の色香になぞらえた無常と、一四六話に詠まれた花橘によって思い起こされる過去(の人物)

が、「弘徽殿の女御」忞子という同一の事象に対するものであるように編集されていると仮定することができる。一四五話で想像し得る花山院が出家の時に強く無常を感じたであろう事柄と、一四六話の詠歌の主題である思い出してもどうにもならないような、ひときわ恋しい過去(の人物)という、二つの要素を満たすものとして、一四四話に登場した「弘徽殿の女御」忞子が当てはまることは、一連の配列上の乱れを説明する上で重要な意味をもっているのではないだろうか。

仮に一四四話が存在しないか、他の人物の話であったら、一四五話はただ梅の花を無常の象徴として見ようとする花山院がいるだけであり、一四六話でも漠然と昔を偲ぶ思いに悩まされる花山院がいるだけである。ところが、一四四話に「弘徽殿の女御」という語が置かれることで、一四五話の無常と見る対象も、一四六話の「こふる」昔も、「弘徽殿の女御」忞子を意識していることを前提とした、統一された花山院の人格によって結ぶことができるのである。

3 「万代も」歌について

弾正宮の上の「万代も」歌は、当然のことながら原拠と思われる歌合においては、直接花山院の「宿近く」歌

に対して向けられたものではない。また一四六話においても厳密にはそのような描写はされていない。しかし一四六話が単に歌合についての話であれば、後の話にも見られるようにもう少し歌の数を増やしても良いのである。ここから、本話で紹介されている歌はこの二首だけである。ここから、一四六話の編集意図の焦点は、歌合上では直接関係を持たないこの二首を、受け手から見て対話関係になるよう併置する効果にあったのだと捉えることができる。

萩谷氏が述べるように、一四六話のこの歌に対する評語は、本歌を異質な歌と受け止めている『袋草紙』や『八雲御抄』と異なっている。「万代も」歌は「新解(二三)」の補説で田口和夫氏が、「編者成季は「仏道に入らん」と解して、「祝」と解するが、出家している院に仏となる事を期待するのは、現世の死を意味する事となる」と指摘しているように、花山院の死を促すかのような歌となっている。それを『古今著聞集』は肯定的に評しているのである。

一四六話の花山院は、一四五話で一度仏道の道を選んだにも関わらず、在りし日のこと、特に執着のあった人物である「弘徽殿の女御」祇子への気持ちをやはり断ち切れていないかのような人物造形を、配話位置と撰歌によって読み取ることが出来るようになっていいる。こうし

た花山院の人物造形と「万代も」歌に付された「松竹にたとへ、鶴亀によせて、千年をいはい、万代を契りても、いかでかはてはなからん。まことに仏の道に入らんのみぞ、まめやかにつきせぬ御祝なるべき」という評語から出家までしてもなお、現世の執心に苦しみ救われない花山院に対する救済の歌として、「万代も」歌を配置した意図を読み取ることが出来るのではないか。

一四六話で形成された花山院の人格は「昔」を偲んでいる。それは戻れない過去全般についてと捉えることもできるが、一四五話の出家のエピソードや、一四六話の花山院の詠歌として撰ばれた「宿近く」歌の「花橘」という語が人物を偲ぶ傾向を示すことなどから、二度と会えない死者である「弘徽殿の女御」祇子への執心を想起させる。この戻れない「昔」という、それが死んだ「弘徽殿の女御」祇子を指すとすればより沈痛な、現世において回復不可能な喪失に対する悲しみを、出家までしても断ち切ることができなかったとすれば、それは生きている限り癒えることのない苦しみであろう。「万代も」歌の示した、出家後の花山院に向けた「仏に君ははやくならなん」は、その苦しみに対する救済の回答として強く機能し得ると考えられる。

以上の花山院と「万代も」歌の関係から、一四六話は、一四五話で一度出家しているにもかかわらず「昔」を断

ち切れない花山院を思わせる「宿近く」歌と、その花山院へ現世の執着の苦しみから逃れる解を示すかのような「万代も」歌の、この二首を抽出したことによる対話の構築が編集意図にあったと想定できる。『八雲御抄』に見えるように単体では評価することが難しい「万代も」歌を、一四六話の評語が全面的に肯定しているのは、一四六話が構築した二首の関係性から導かれた結論とすれば当然である。この一四六話の対話関係が成立するためには、一四五話の出家をもって、これ以上執心を断つ手段が現世に存在しなくなったことが重要な前提となっている。そしてその一四五話の出家で詠まれた「常ならぬ世」を象徴し得る人物として、祇子を想起させる「弘徽殿の女御」の語が一四四話にあることは、「弘徽殿の女御」祇子を偲ぶ花山院の人格を形成する三話の連関を生み、一四六話における二首の対話関係をより効果的にしているのではないか。

一四四話に「弘徽殿の女御」という、花山院の在りし日の執着を象徴する語が置かれたからこそ、三話の連関を経て、「万代も」歌はその効果を最大限発揮できる状態で採られることができたのである。

【注】

▽大学名や学会名などの旧字以外は新字に改めている。

全体を通して、和歌の検索にCD-ROM版『新編国歌大観』、『新編国歌大観』編集委員会 監修 二〇〇三年六月 角川書店)を利用した。

(1) 島田遼氏『古今著聞集』巻第五和歌第六「帯刀陣歌合」説話の考察『中央大學國文』第六十二号 二〇一九年三月 中央大學國文學會 三十三頁。

(2) 新潮日本古典集成59『古今著聞集 上』西尾光一 小林保治 校注 一九八三年六月 新潮社)一九六頁「弘徽殿の女御の歌合せに文字鎖の折句の事」。なお、以降の『古今著聞集』本文の引用も同様。

(3) 『平安朝歌合大成 増補新訂 第二巻』萩谷朴 著 一九九五年十一月 同朋舎出版)七九二頁、「長徳二年八月」寛弘八年六月「弘徽殿女御義子歌合」。

(4) 前掲注3『平安朝歌合大成 増補新訂 第二巻』七九二頁「考証」下段。(中略)は稿者による。

(5) 櫻井利佳氏『古今著聞集』の原拠としての『歌合(十巻本)』試論(『説話』第十二号 二〇一四年九月 説話研究会)四十四頁。

(6) 谷知子氏 縄手聖子氏 金井由貴子氏 蔡雅如氏 肥後陽子氏 大江あい子氏 堀江マサ子氏 伊藤香弥氏 『古今著聞集』巻第五「和歌第六」を読む(1)『フェリス女学院大学文学部紀要』四十七号 二〇一二年三月 フェリス女学院大学)一九七頁「語釈」、金井由貴子氏担当か。

(7) 日本古典文学大系84『古今著聞集』(永積安明 島田

勇雄 校注 一九六六年三月 岩波書店)の四一頁の頭注では「花山院の女御低子か」と記し、五六九頁の補注にて後朱雀天皇の女御生子の可能性を提示するも、「説話の配列が年代順をみだす」とし、「かたがたこの弘徽殿の女御は花山院の女御低子か」と疑問を投げかけている。

(8) 前掲注5 櫻井氏論文(二〇一四年)参照。

(9) 馬淵和夫氏、相田満氏、新垣泰一氏、稲葉二柄氏、歳中しのぶ氏、小山聡子氏、坂巻理恵子氏、桜井利佳氏、滋野雅民氏、田口和夫氏、外村展子氏、船城梓氏、馬耀氏、三田明弘氏、南ちよみ氏、宮崎和廣氏『古今著聞集』新解(二)和歌第六』『説話』第十二号 二〇一四年九月 説話研究会)一四八頁。「【一四四話】」、桜井利佳氏担当部分。

(10) 『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』萩谷朴 編 一九九五年五月 同朋舎出版)六五八頁に記載されている日記の本文を参照。

(11) 前掲注5 櫻井氏論文(二〇一四年)参照。

(12) 前掲注2『古今著聞集 上』一九七頁「花山院、紅梅の御歌の事」。

(13) 和歌文学大系47『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(佐藤道生 柳澤良一 注釈 二〇一一年七月 明治書院)三六頁。

(14) 『新古今和歌集全注釈 五』(久保田淳 著 二〇一二年二月 角川グループパブリッシング)一三三頁。

(15) 笠間注釈叢刊38『撰集抄全注釈 下巻』(撰集抄研究会 編著 二〇〇三年十二月 笠間書院)四四一頁。

(16) 久保木哲夫氏「花山院御集考」(鈴木一雄 編『平安時代の和歌と物語』一九八三年三月 桜楓社)によれば、中世半ばごろまでは確実に御集が存在しており(三〇〇頁)、親撰であった可能性も指摘している(四十六頁)。

(17) 国語国文学研究叢書8『花山院の生涯』(今井源衛 著 一九六八年七月 桜楓社)一〇三頁。

(18) 前掲注14『新古今和歌集全注釈 五』三五頁。

(19) 小島孝之氏「撰集抄」形成私論(一)―巻八を中心にして―(『実践女子大学文学部紀要』第二十号 一九七八年三月 実践女子大学)五頁。

(20) また、『新古今集』の古注釈が当該歌を出家後の作としていることについては、久保田氏が前掲注14『新古今和歌集全注釈 五』において『古今著聞集』と『撰集抄』の話を引いた後、「旧注において、出家後の作と見なしているのは、このような説話伝承と関係があるのであるうか(三十五頁)」と、古注の解釈が説話に拠るものである可能性に触れている。

(21) 前掲注2『古今著聞集 上』「解説」五〇四頁。

(22) 新訂増補國史大系『日本紀略 第三(後篇)』(黒板勝美 國史大系編修會 編 一九八〇年十二月 吉川弘文館)一五一、一五二、一五四頁。

(23) 以上、本文は『栄花物語全注釈(一)』(松村博司 一九六九年八月 角川書店)より。(中略)は稿者による。

- (24) 『古事談』小林保治 校注 一九八一年 現代思潮社)四六頁。
- (25) 日本古典文学大系86 『愚管抄』(岡見正雄 校注 一九六七年一月 岩波書店)一六五頁。赤松俊秀
- (26) 「天下を治め給ふ事二年ありて。俄に発心して花山寺にて出家し給ふ。弘徽殿の女御かくれて悲歎まし・ける折をえて。」『群書類従・第三輯 帝王部』(瑠保己一編 一九三三年六月 平文社)「卷第二十九・神皇正統記」七十九頁。
- (27) 前掲注9 『古今著聞集』新解(三)和歌第六「一四九頁。【一四五話】」桜井利佳氏担当部分。
- (28) 前掲注2 『古今著聞集 上』一九八頁「花山院・彈上宮の上、東院にて御歌の事」。
- (29) 前掲注10 『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』七〇〇頁。
- (30) 前掲注10 『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』七〇二頁。
- (31) 前掲注10 『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』七〇七頁上段。
- (32) 『能因法師集・玄々集とその研究』(川村見生 著 一九七九年六月 三弥井書店)九三頁。
- (33) 前掲注13 『和漢朗詠集・新撰朗詠集』三三三頁。
- (34) 和歌文学大系34 『金葉和歌集・詞花和歌集』(錦仁 柏木由夫 注釈 二〇〇六年九月 明治書院)二二六頁。
- (35) 前掲注34 『金葉和歌集・詞花和歌集』一五六頁。

- (36) 『新撰朗詠集』については川上新一郎氏『新撰朗詠集』と三奏本『金葉集』―『玄々集』の受容について―(『和歌文学研究』第三十八号 一九七八年三月 和歌文学会、木村初恵氏『新撰朗詠集』の和歌について(『國文學論叢』第三十四輯 一九八九年三月 龍谷大學國文學會)。三奏本『金葉和歌集』については谷山茂氏『玄々集と金葉集三奏本』(『国語国文』二十一卷九号 一九五二年十月 中央圖書出版社)。詞花和歌集については谷山茂氏『金葉集と詞花集―玄々集をめぐる―』(『国語国文』二十二卷六号 一九五三年六月 中央圖書出版社)に、それぞれ『玄々集』との関係について詳しく言及している。
- (37) 安西迪夫氏は「玄々集の成立」(『言語と文芸』一九六四年七月 大修館書店)で、『玄々集』は「能因―長能―花山院を結ぶ幹」(六七頁)に枝葉がついたものであると言える可能性を指摘している。
- (38) 新日本古典文学大系29『袋草紙』(藤岡忠実 校注 一九九五年十月 岩波書店)三一〇頁。
- (39) 『八雲御抄の研究 正義部 作法部』(片桐洋一 編 二〇〇一年十月 和泉書院)本文篇六三頁、書陵部本。
- (40) 前掲注29 『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』七〇七頁下段。
- (41) 前掲注2 『古今著聞集 上』一九八頁頭注。
- (42) 新編日本古典文学全集11 『古今和歌集』(小沢正夫 松田成穂 校注・訳 一九九四年十一月 小学館)七八

頁。

(43) 前掲注9 『古今著聞集』新解(三)和歌第六(二〇一四年)一五〇頁上段。「【一四六話】田口和夫氏担当部分。なお歌の引用は前掲注42『古今和歌集』四十二頁を参照した。

(44) 私家集全釈叢書12『相模集全釈』(武内はる恵 林マリヤ 吉田ミズズ 著 一九九一年十二月 風間書房) 五一〇頁。

(45) 『和泉式部集全釈 正集篇』(佐伯梅友 村上治 小松登美 著 二〇一二年六月 笠間書院) 六九二頁。

(46) 前掲注5 櫻井氏論文(二〇一四年) 四一頁。

(47) 前掲注9 『古今著聞集』新解(三)和歌第六(二〇一四年)一五〇頁。「【一四六話】田口和夫氏担当部分。

田口氏は色好みで知られる出家後の花山院像を想定し、「乱行を止めて道心に帰れの意あるか」としている。

(おのぞら たかゆき 本学大学院博士前期課程

令和二年度修了)